

## じんけん市民講座



ギターを弾きながら歌う  
黄光男さん

### ハンセン病とコロナ差別

ハンセン病家族訴訟原告副団長  
ファン グァンナム  
黄光男さん

第2回じんけん市民講座講演会は、10月7日淡路市役所大会議室にて開催され、57人が参加しました。  
在日朝鮮人であり、母と姉がハンセン病を発病し、長島愛生園へ入所となったため、生後1歳で育児院に入所。9歳で家族5人の生活が戻っても、親子関係が築けなかったそうです。父から聞き出した母の入所時の様子とその後の地域での差別。銭湯に断られたこと等、お父さんの肉声で紹介。「現在のコロナ差別の状況と同じであり、偏見と差別に苦しめられてきた本人や家族のことを知って欲しい。」と。  
ハンセン病家族訴訟原告副団長として、2019年(令和元年)6月、家族訴訟に勝訴。「当事者と家族が関係性を取り戻し、故郷に帰れるまちにしてほしい」と語られました。  
最後に、自らの作詞・作曲のギター演奏「閉じ込められた生命」等を披露されました。



コロナ差別について話す  
村松元樹さん

### 既存差別を表出させた新型コロナウイルス差別

(公財)反差別・人権研修所 みえ(三重県)  
事務局長 松村 元樹さん

「差別が現存する社会では、すべての人が「当事者」である。」を副題に、9月16日、第1回じんけん市民講座講演会が淡路市役所大会議室にて開催され、42人が参加しました。  
新型コロナウイルス感染者とその家族・医療従事者・関係者とその家族・運送業関係者等に対する全国的な差別事象を紹介し、「新型コロナ差別」が現存する社会では、差別のみへの対策を講じるだけでは問題の本質が解決されない。既存差別すら自治体には報告などが上がりにくい現状である。  
「会場の皆さんは、差別をなくす側に立つのか、差別をする側に立つのか。」と問いかけもあり、「何もしないことは中立ではなく、差別に加担しているということを見つけて欲しい。」とのべました。

### 発達障害を理解する 当事者・母の立場から

精神保健福祉士 笹森 理絵さん



9月12日、淡路市役所で、笹森理恵さん(精神保健福祉士)を迎えて、淡路市保育園(所)・認定こども園部会研修を行いました。  
自身も発達障害であること、母親との関係。自分が母親となって、子どもと向き合い、できないことを叱りつけるのではなく、できることに着目して、一緒に考えることなど、保育・子育てのヒントを具体的に話されました。  
障害のある人も、そうでない人も「その人らしさ」を大切に、寄り添い見守っていく余裕のある子育てができるよう周りのサポートも重要であると話されました。



8月29日、北淡震災記念公園で行われた野外映画

### 人教北淡支部で企画 北淡震災記念公園で野外映画

#### 「子ども食堂にて」

8月29日、北淡震災記念公園で、淡路市人権教育研究協議会北淡支部主催による野外映画会が行われ、37人が参加しました。新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、マスク着用・完全予約制の上で映しました。